

氏名 八木 紗椰
ヨミガナ ヤギ サヤ
学位の種類 博士（学術）
学位記番号 博美第701号
学位授与年月日 令和4年3月25日
学位論文等題目 （論文）ラオス北部フアパン県サムヌア郡における象獅子紋様の研究
副題：ラオ・タイ系諸族の紋織物を通して

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	長谷部 浩
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	八谷 和彦
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	原田 愛

（論文内容の要旨）

ラオス北部フアパン県サムヌア郡のラオ・タイ系諸族の織物に象られるシーホ（象獅子）紋様は、ラオスで親しまれている神獣紋様のひとつである。象頭に獅子の体、鳥の足をもつキマイラの姿で象られる。本論では、シーホ紋様の多様な装飾パターンに注目した。頭身を草花で飾り、背上に人型や建造物を乗せ、体内には同種もしくは異種の生き物を内蔵する。ラオスの織り手に、シーホ紋様を構成するこれら諸模様について尋ねると、様々な名称が返ってくる。ラオスのシーホ紋様の装飾パターンを整理し、その複雑な造形的特徴と多重なイメージについて考察する。

ラオス人民民主主義共和国は、タイ、カンボジア、ベトナム、中国、ミャンマーに囲まれた内陸国であり、山岳地帯と国土を縦断するメコン川の恵みを受ける。14世紀にラーンサーン王国（百万頭の象の王国の意）として統一され、東南アジアの緩衝国家として成長した。2021年現在、国民は50の少数民族グループに分けられる。第1章では、ラオスの歴史的背景について述べ、多民族の文化がどのようにして保たれてきたのかを確認する。

第2章では、シーホ紋様の基本的な造形的特徴と象徴性について述べる。シーホはもともとヒンドゥー教および仏教の物語に登場する神獣であり、ラオスの仏教寺院の壁画、レリーフにも表れる。仏教の教えを視覚的に説明する役割があり、シーホの象頭は慈悲を、獅子の体は力強さ、統率力を象徴する。

16世紀半ばから17世紀頃に書かれたとされる、ラーンサーン王国の叙事詩人パン・カムの詩『Sang Sinxay（シンサイの歌）』では、人間の王族の一員として、象頭に獅子の体をもつシーホが登場する。ヒンドゥー教および仏教の影響を受けて書かれたこの詩では、シーホは強い力で悪鬼と戦い、シンサイ王子を助ける男児として描かれる。このシーホのイメージはラオスの織り手にも広く知られており、現地で行った聞き取り調査でも、ほとんどの織り手がシンサイの物語について答えた。

しかし織物のシーホ紋様は、体内に生き物を宿した姿で象られるなど、妊娠と出産を象徴するパターンが多く観察された。この特徴はヒンドゥー教および仏教のシーホ図像、物語には認められなかった。

シーホ紋織物の使用例として、先行研究資料では、赤ん坊のためのねんねこ半纏、ブランケット、シャーマン儀礼に用いられるヘッド・クロス、ヒーリング・クロス、葬儀に用いられる棺桶カバーなどが記録されていた。一方で筆者が収集した、2000年以降に製作された織物の資料では、女性用のショール、壁掛け、テーブルクロス、シンと呼ばれる伝統的な女性用巻きスカートに加工される例が多い傾向にあった。

第3章では、収集した織物の現物、画像、先行研究資料の画像をもとに、シーホ紋様を構成する諸模様を①同種の生き物を体内に内蔵する ②異種の生き物を体内に内蔵する ③頭身を飾る草花模様 ④背に乗る人型および建造物模様 の4つのパターンに分類し、他の神獣紋様の装飾パターンと比較した。

結果、ホーン（神話上の鳥）紋様とナガ（川蛇もしくは龍）紋様の装飾パターンとの類似性が観察された。

シーホ紋様は仏教におけるシーホ図像の特徴を引き継ぎつつ、より古い時代からあったホーン紋様やナガ紋様の装飾模様を内蔵していったと考察された。いくつかの装飾模様は、シャーマニズム的解釈と仏教的解釈によって異なるモチーフに捉えられており、シーホ紋様のイメージを複雑にさせる一因となっていた。

第4章では、4つの装飾パターンの由来を追求した。そしてホーン紋様、ナガ紋様の象徴性がシーホ紋様のイメージに与えた影響について考察した。

中国神話を由来とするホーン紋様は、草花の咲き乱れる楽園の世界観をシーホ紋様と共有した。また同異種の生き物を体内に内蔵する、人型模様を背上に乗せるといった装飾パターンも共通しており、これは生まれてくる赤ん坊や死者の魂を運ぶ姿を表現している。ホーンは天上の世界から魂を連れてくると信じられていたためであり、シーホもまた魂を運ぶと考えられた。これは仏教美術における、神族を背に乗せて運ぶシーホ図像とも親和性が高い。

一方でナガ紋様は魂を守護する神獣と考えられた。妊娠したナガは興奮して、強い呪力を発揮するとされ、シャーマン儀礼に用いられるヘッド・クロスや、部屋を悪霊から守るドアカーテンなどに好まれた。呪術的な儀式で用いられる織物には、妊娠したナガとシーホがともに象られ、シーホの頭身の一部がナガに変身する例も見つけられた。

ホーンの魂を運ぶイメージと、ナガの魂を守護して育むイメージが、シーホ紋様には共存しており、造形的特徴および紋様の使用例に表れていた。

本研究ではサムヌア郡に暮らすタイデー族、タイダム族の資料を中心に扱った。とくにタイデー族はパー・チョック（多色の緯浮織り）の技術を誇っており、ラオスの織物市場でも高い評価を得ている。その地方技術はサムヌア織りと呼ばれ、緻密な幾何学紋様で神話上の生き物や動植物のモチーフが表現される。アニミズム、シャーマニズム、ヒンドゥー教、仏教が複雑に融合された世界観が観察される。

現地調査は2016～2019年の各年に行なった。訪れたのは、ヴィエンチャン県、ルアンパバン県、サイヤブリ県、フアパン県、シェンクワン県である。文献調査と現地調査から得られた情報を照応し、研究を進めた。

（論文審査結果の要旨）

八木はラオス北部のラオ・タイ系諸族の伝統的な手法により生産される織物に使われる神獣（象獅子、川蛇、鳥など）のイメージを中心に、その造形的特徴とそれらが象徴する意味の由来や変遷の分析を試みている。

本研究のために、彼女は2016年～2019年にかけて複数回、ラオスのヴィエンチャン県、ルアンパバン県、サイヤブリ県、フアパン県、シェンクワン県を訪れ、実物の織物を入手しての意匠の検証、織り手への聞き取り調査、ラオス国立大学情報科学センター、ラオス国立美術学校でのリサーチと教員へのヒアリング、寺院の僧侶、織物やシン（当地の伝統衣装）の店舗主まで幅広い層への聞き取り調査と、各種の文献調査を複合的に用いて、長期に渡り精緻な分析を試みている。

伝統的なラオ・タイ織物は養蚕による絹糸の生産から染色～織りまで数ヶ月～1年以上の期間と多くの手仕事により家内で生産されるものであり、その生産手法や、意匠に使われるシーホ（象獅子）、ボーン（鳥）、ナガ（川蛇）などの図像の意味や文様がそうなる理由などはあまり解説されることはなかった。また、織り手も図像の意味などは深く考えず、織物の技術的な側面・品質を中心に評価を行ってきた。そうしたなか、八木はこれらの神獣の文様、特にシーホ（象獅子）に関してラオスとその周辺国での神話の分析、また仏教やヒンドゥー教での神獣の扱われ方などを発端に文様の意味を丁寧にときほどいていく。

ラオスの織物は世界的にもまだそれほど深く研究のなされていない分野であり、このジャンルのまとまった研究は非常に重要である。同時にラオスは1953年～75年の長期にわたる内戦と、昨今の近代化によって、急速に都市化・近代化が進んでおり、このような伝統的、手工業的な織物は急速に衰退しつつある。当地での織物の利用方法も、村落での自家生産・自家消費による冠婚葬祭等の儀礼利用から観光客向けの

販売品に移行しつつあり、そうすると伝統的な文様も徐々に失われ、市場で売れるデザインへ変わっていく可能性も高い。

そうした状況の中での本研究は大変重要なものであり、このような貴重な文化を外国人の視点から多様な手法を駆使して論文にまとめるのは簡単なことではなかったはずだが、長期のフィールドワークを通して非常に丁寧にまとめられている点も素晴らしく、本研究は博士論文にふさわしいと高く評価した。

(作品審査結果の要旨)

島崎紗椰は博士論文において、ラオ・タイ系諸族の織物に表される神獣「シーホ」の紋様形式が多様である点に注目し、現地調査と先行研究を通して、現地の人々の暮らしにおける織物の意味、宗教的背景、1950年代から70年代まで続いた内戦がもたらした状況、織物市場における取引や外国人観光客が与えた影響といった観点から、シーホ紋様が多様な造形的特徴を持つにいたったかを探っている。ラオスの機業技術が口承で受け継がれたために参照可能な記録が限られているという制約に加え、神話上のモチーフにはアニミズム、シャーマニズム、ヒンドゥー教、仏教が複雑に融合された世界観を含んでいること、織り手ごとに神獣に対する解釈が異なること、さらにコロナ禍により海外渡航を伴う調査の続行が困難となったことから、紋様形式の多様性の根拠は明確な形とはならなかったが、織物の現物および画像データを可能な限り収集し、紋様の造形的特徴を分類、整理した上で、現地の人びとにとっての織物の意味を研究した意味は大きい。

作品「燃えぬ紋様」は、シーホ紋様を研究していく中で、現地調査において実際に目にした作業の様子や、織り手から聞き取った話に着想を得て創作されたアニメーションである。一人の少女が織物に表された紋様と出会ったことを機に、大きな力に包まれていくさまが描かれる。シーホ紋様は作中で重要な要素として登場する。日本語では「象獅子」と訳されるシーホは、頭が象、体が獅子、脚は鳥で象られており、背に魂を乗せて魂を運ぶ生き物と考えられている。同時に悪霊を追い払う力を持つとも考えられることから、シャーマンの部屋のカーテン、妊婦や赤ん坊を包む布に織り込まれるという。本作においても「包む」「包まれる」という要素が強く描かれ、作者自身がラオスの竹笛や木琴、チェロにより演奏した作中音楽が、その幻想的な映像世界に深い奥行きと広がりを与えている。

一家に一台織り機があり、織物を身近なものとして生きている織り手たちは、紋様の象徴的意味よりも、いかに美しく織り上げられるかという現実的・具体的な事柄を重視しており、そうした中で生まれてくる赤ん坊のためのおくるみや自分が死んだ時に着る衣服を織る際に神獣紋様が象られる。それは日々の暮らしに内在化した祈りのかたちであり、言葉で表し得るものではないだろう。本作品はラオスの伝統的な織物文化を印象的に伝えるだけでなく、島崎にとってのシーホ紋様を象った織物であり、研究対象についての深い探求と理解に基づく豊かな作品であることを評価し、博士号に値すると判断した。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、ラオスでの周到なフィールドワークを基にして、広範囲に渡る紋織物を収集分類した。こうした地道な調査を基にして、象獅子を中心とした図像がいかなる文化的な意味を持つかを明らかにしている。新型コロナウイルスの脅威がなければ、さらに現地調査や聞き取りを行えたであろう。この致し方ない事情を勘案せずとも、論文に関しては、博士論文にふさわしい水準に達しているとの審査結果を得た。また、作品については、アニメーションの手法を最大限に生かし、自由奔放な想像力をこめて、人間と精霊の交錯する大地を、よく描いている。色彩のゆたかさ、構成の巧みさもあって、本作品もまた、博士の学位にふさわしいとの評価を得た。

総合的に、本申請は、主査、副査、全員の賛成をもって学位の授与に値するとの結論を得た。